

パラリンピック・パラリンピアン・障がい者に 対する人々の認識： 大学生を対象としたインタビュー調査からの検討

遠藤華英

1. 研究背景

障がい者への差別的態度は、ヘイトスピーチなど公然で表現されるもの（古典的偏見）だけではなく、しばしば間接的に表現される場合（象徴的偏見）がある（Keller & Galgay, 2010）。この象徴的偏見とは、ある対象に対して、すでに偏見や差別の問題は解決しており、障がい者が不平を訴えることは不当で、正当化されるべきではないといった態度である（Henry & Sears, 2002）。このような差別や偏見の問題に対し、パラリンピックはその解決に向けた一定の役割が期待されてきた。Howe（2008）は、パラリンピックは、障がいに関する社会的障壁や固定観念を打破し、より公平で包括的な社会を達成するための手段としての価値を有しているとする。また、パラリンピックやパラスポーツの直接的な観戦のみならず、メディアを介したパラリンピックへの接触が、パラリンピアンに対する市民の捉え方、ひいては障がいの平等とインクルージョンに対する人々の態度を変える可能性が見出されている（Bartsch et al., 2018; Hodges et al., 2015）。このような期待から、国民・市民がパラリンピックやパラリンピアンに対してどのような価値を抱いているのか、そしてパラリンピックやパラリンピアンを通じ、障がいや障がいのある人々に対する態度・行動は変容するのか実証的な研究が進められてきた（Hodges et al., 2015）。

まず、パラリンピックやパラリンピアンに対する認識について、Hodges et al.（2015）は、国民・市民の大多数がパラリンピック・スポーツは「二流の競技」であるという認識を持っており、パラリンピック以外の場でも障がい者スポーツを見たいという観客の意欲は依然として限定的であったと指摘している。また、Fitzgerald（2012）は、ロンドン2012パラリンピック以前に実施したイギリス在住の障がいのない若者を対象とした調査結果から、障がいのない人々とは異なる身体特徴のある人々に対する嫌悪感や不快感が、パラリンピック自体を正当なスポーツとして受け入れられていないという心理につながるとした。

一方で, Hodges et al. (2015) は, ロンドン2012パラリンピックの直前と直後のインタビュー調査の結果から, 文化慣習的に同情の対象として固定観念化してきた障がい者像のメディア表象に変化が生じたとした。障がいについて無関心であった国民・市民にとっては, ロンドン2012パラリンピックが一定の役割を果たしたとし, 障がい者問題をめぐる公的な対話の発展に向けた, より前向きな社会的変化を暗示しているとも強調している。

また, パラリンピックを通じた障がいの認識変容については, 「スーパークリップ (supercrip)」が批判的な省察として示されてきた。「スーパークリップ」とは勇気, 熱意, 努力によって不可能を成し遂げたと表象される障がい者を指す (Berger, 2004)。既存のメディアが映し出すパラリンピアン像は, 個人の努力量によって障がいを乗り越えた存在として強調されるため, 批判的に捉えられてきた。この点に関連して, Howe (2008) は, 障がい者の中にはヒエラルキー構造が存在しており, パラリンピアンは健常者スポーツの観念と合致し, 受け入れやすいことから, 階層の頂点に位置づけられるとした (Howe, 2008)。このヒエラルキー構造の階層間に生じる差異はマジョリティの視点から「他者」として認識され, 特に重度障がい者などに対して距離を置くメカニズムとして機能するとされている (Silva & Howe, 2012)。

以上のように, パラリンピック, パラリンピアン, そして障がい全般の問題に対する国民・市民の認知や態度に着目した研究が進められている一方, 調査対象国・地域は欧米諸国に偏重している。調査対象地域の慣習や文化的価値観, 社会経済状況の差異によって, スポーツや障がいの捉え方も変化するため, 調査対象地域の偏重は研究結果の一般化に向けた障壁となるとされる (Pullen & Silk, 2020)。

そこで本研究は, 日本国民・市民を対象とした研究の第一段階として, 大学生を対象とし, 「オリンピックと対比したパラリンピックの位置づけ」, 「パラリンピックによる社会的影響」, 「パラリンピアンと一般障がい者に対する印象の差異」など, パラリンピック・パラリンピアン・一般障がい者に対する認識の傾向を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1. 調査対象

調査対象は, A大学およびB大学に所属する学部生19名である (表1)。なお, 調査対象の学部生は専門的に障がいについて学んでいるものは含んでいない。

表 1. インタビュー対象者一覧

No.	学年	性別	年代	障害の有無	
				自身	親族
1	3	男性	20代	×	×
2	2	女性	20代	×	○
3	2	女性	20代	×	○
4	3	女性	20代	×	×
5	3	女性	20代	×	×
6	3	男性	20代	×	×
7	3	男性	20代	×	×
8	3	男性	20代	×	×
9	3	男性	20代	×	×
10	4	女性	20代	×	×
11	3	男性	20代	×	○
12	1	男性	20代	×	×
13	3	男性	20代	×	×
14	1	女性	20代	×	×
15	1	女性	20代	×	×
16	3	男性	20代	×	○
17	1	男性	20代	×	○
18	3	女性	20代	×	×
19	3	女性	20代	×	×

2.2. 調査方法

調査は2023年11月に実施し、パラリンピックや身の回りの障がいに関する事項について詳細に尋ねるために半構造化面接法を用いて行った。発言内容はICレコーダーで記録し、その逐語起こしをした。質問は、パラリンピックやパラリンピアンに抱くイメージ、オリンピックや健常のアスリートと比較した際の認識、パラリンピックの社会的影響と個人的な影響などについて聴取した。具体的な内容は別添資料に記載している。

2.3. 倫理的配慮

調査対象者には、自身や自身の家族、身の回りの人の障がいに関する事項が質問に含まれること、インタビュー調査は音声データとして記録されることなど、調査参加にあたる注意事項および遵守事項について文書および口頭で説明した。また、調査前に調査同意書への署名を求め、これをもって調査への同意とみなした。

3. 結果

3.1. パラリンピックに対するイメージとオリンピックとの対比

まず、パラリンピックに対して抱くイメージについて自由に語らしてもらった。結果として、パラリンピックはすでに競技性の高いエリートスポーツの大会だという発言が多くなされた。オリンピックと比較対照した場合、両大会に印象の差異が生じるか問うた際も、パラリンピックはオリンピックと同等のエリートスポーツの大会であると発言するケースが多かった。また、両大会の違いを感じると回答した者から具体的に提示された内容は、出場選手の障がいの有無や実施競技の違いなど、大会の構造上の差異が挙げられた。一方で、オリンピックの観戦者数やメディア媒体の視聴者数を基準とした世間の注目度の違いから、パラリンピックはオリンピックに付随するものとして捉えているとのコメントも得た。例えば、以下のような発言である。

オリンピックと近い日付で開催されるから、オリンピックの対になるものみたいな、そういうイメージでした。スポーツという文化の中では障がいの有無は関係ないのかなと思いました。(No.8)

オリンピックのほうがやっぱり色々な人が観てる、注目度が高いと感ずます。まだパラリンピックはそこまでたくさんの人に届いているかは分かんないという印象があります。(No.5)

3.2. パラリンピアンとオリンピアンに対するイメージの対比

次に、パラリンピックの観戦経験、またその観戦経験を通じて抱いたパラリンピアンに対する印象について聴取した。本調査の対象者のほとんどはパラスポーツの直接観戦経験はなく、メディアによる視聴経験に留まった。また、このメディア視聴も、パラリンピック大会自体ではなく、ダイジェストやニュースなど大会外の放送視聴がほとんどを占めた。本論では便宜上、このような大会以外のパラリンピック視聴も含めて観戦経験とした。観戦経験のある競技として提示された競技は、車いすテニスや車いすバスケットボールなど東京2020パラリンピックでメダルを獲得し、また比較的メディア報道量が多い競技であった。さらに、パラリンピアンに対して抱くイメージについては、多

くの回答者がパラリンピアンをエリートアスリートとして認識し、また、一部の回答者は障がいのない人々よりスポーツスキルが高い存在と捉えていることがわかった。このようなエリートアスリートとして位置づける発言は、パラリンピックで発揮される競技スキルへの評価だけではなく、選手の障がいと関連してコメントされる場合が多かった。具体的には、障がいのある人がスポーツを実施するという驚きや、自分自身にパラリンピアンを投影し、その努力量を自分自身が再現できるか否か省みるような発言がみられた。以下が関連する発言である。

私自身テニスをしていて、普通に健常者でさえ、ソフトテニスって上達するのがすごい難しいスポーツだと思っています。なのに、肢体不自由、脚が不自由だったりとかで車いすでテニスをしてるって、どうしてやろうと思ったんだろうって思うと同時に、本当、すごいなって思いました。ただでさえ自分が、テニス、6年間やってたんですけど、健常者で上達するのがすごい難しかったのに、自分が肢体不自由になって車いすで生活する中でテニスをやろうって思ったことがすごいなって思いました (No.2)。

(私自身は彼らと) 同じスポーツをできないながらもすごいなと思ったし、自分もまだまだ頑張れるんだなっていう。(No.13)

そもそもスポーツをしっかりちゃんと本気でやってる人ってすごいなって思ってるから、それに加えて、自分たちが普段当たり前に使っている体の部分がない状態で、あんなに動けるのはすごいなって思います。(No.14)

素直にすごいです。障がいを抱えてても、これだけ他の自分の体を生かして試合に挑んでるってすごいなっていう印象です。(No.5)

3.3. パラリンピアン競技環境の現状と改善に対する態度

続いて、パラリンピアン競技環境の現状に対する認識や、その改善に対する態度を、メダル獲得に伴う報酬金額をひとつの論点として聴取した。結果として、パラリンピアンに対してもオリンピックと同等の報奨金や評価を望む声が多く集まった。パラリンピアン競技環境や待遇の改善に賛同する理由には、パラリンピアン努力量や競技生活に係る負担の多さ、公平性の担保が挙げられた。パラリンピアンは、大会出場に至る義

肢装具などの競技用具の調達、遠征費の確保に際する金銭的な障壁、練習相手や指導者を集める時間的コストが含まれるとし、大会の商業的価値よりも選手個人の努力に見合う評価を望む共感が示された。一方で、政府や競技団体から与えられる報酬は、大会自体のもつ商業的価値や政策的な優先度、オリンピックと比較した場合のパラリンピックのメダル発行数によって制限を受けるとの見解も示された。具体的には以下のような発言である。

パラスポーツじゃなくてスポーツとしてくられるべきだと思うし、同等の扱いを受けたほうがいいんじゃないかなと思います。(No.4)

私はパラリンピックに出ている選手たちも同じ賞金とか、そういうところに関しても同じように上げていくべきかなって個人的には思います。障がい持っているからっていうのも変ですけど、それで苦労している面とか、他の人たちに比べてお金がかかる面とかも多分あると思うので。そこに対しての補助なり、その分のお金っていうふうにするなりでも何でも分かんないですけど、そういうふうにしてでも同じ土俵というかにするべきかなって思います。(No.13)

大会の収益とか知名度とかでそういう差が付けられてるとしたら、仕方がないのかなと思っています。理由は、女子サッカーと男子サッカーで、それでも給料の差が、同じサッカーでも違うっていうので、女子サッカーの団体が抗議してるみたいなことがあったんです。(中略)オリンピックはちょっと別なのかもしれないですけど、ビジネスが絡んでくるのは仕方がないことなのかなと思うんですけど、不平等には変わりないから、もっとそういうの上げられる仕組みを目指すのは一番やるべきことなのかなとは思っています。(No.1)

金メダルとかの取れる人の数がパラリンピックのほうが多いじゃないですか。だから国がそのお金を流る気持ちも分かるけど。でも、他のくだらないことに使っているとところとかあるんで、そっちに使うんやったら、そんなもん出したらいいんじゃないかなと思います。努力は多分、同じぐらい、いやもっと(パラリンピアンの方が)やってるんで。なんで、出すべきかなって思います。(No.7)

3.4. パラリンピックの社会的影響に関する認知と個人への影響

パラリンピックの存在が、社会に対してどのような影響力を持つと思うか、またそれが回答者自身にどのように影響しうるのか聴取した。

パラリンピックが社会に与える影響については、障がいに関する正しい知識の普及、障がいに関する固定観念の払拭、そして障がいのある人に対するエンパワメントが挙げられた。

回答者自身が受けた影響については、障がいに対する価値観の変化、個人の物事に対する動機付けの変化などが挙げられた。本調査の対象者は、障がいのある当事者との接触経験が少ないことから、パラリンピックを通じて障がいに関する知識を得たとコメントすることが多かった。パラリンピアンに対する評価と同様、自身への影響は選手の「障がい」を前提として発言される場合が多く、現時点での自分自身への省みとして示された。具体的には以下のような発言である。

障がいを持っている方に対しては、ありきたりですけど、可能性を見せて勇気付けるっていうのと。あと、障がいを持っていない方には、こういう障がいがあるっていうイメージを与える。(No.1)

他の障がいを持つてる人とか、心で不安がある人に向けての応援メッセージじゃないけど、生きる力になるっていうのが一番強いんじゃないかなって思います。自分はピアノを大学入るまでずっとやってたんですけど、そのときに自分はどっか障がいがあるとかいうわけじゃないけど練習怠ってとか、そういう諦める場面が結構あったんです。それを諦めずにやってるってすごいなってというのが結構、(私個人が) 影響を受けたとこかなって。(No.5)

障がい者が健常者より劣ってるみたいな風潮じゃないですか。そういう意見があるじゃないですか。ああいうパラリンピックとか見ると、僕よりも器用なんだなって、体を動かしたりするのが得意なんだなって思いますね。だから、別に、普通の人より劣ってるわけではないなって思います。そういう器用だなって感じて、自分が考え方変わった。(No.12)

たとえ肢体不自由になった方でさえ頑張ってるから、健康な自分が元気づけられたっていうか、頑張らなきゃいけないなって思わされた。(No.2)

一方で、社会に対して影響はあると認めつつも、それが自身の考えや生活の仕方に影響を与えるものではないとの発言もなされた。パラリンピック自体に社会に何らかの良い影響をもたらすものであるが、それは自身の生活に影響を及ぼす範囲外の物事であり、日常的に意識することはないという関心の低さ、そして生活圏内に障がい者がいないという環境的要因と関連して発言された。

あまり障がいのある人っていないんで、どんな障がいがあるか、正直知る機会がパラリンピックしかなかった。どんな（障がい）があるか知る機会になってる気がします。でも自分自身は影響は受けてないです。(No.9)

3.5. 障がいのある人のスポーツ環境に対する認識

続いて、一般の障がいのある人々が自由にスポーツ活動に参加できる社会が実現しているのか現状の認識を問い、そして認識を踏まえた上で環境整備の必要性について聴取した。結果として、調査対象者は障がいの有無によってスポーツをする、または観戦する環境に格差が生じていると認識しているという点で一致した。また、スポーツ環境のみならずあらゆる社会活動から障がいを理由とした排除が行われていることを認識していた。

スポーツに限らず生活の中でもそうなんですけど、例えば、高校に入学する際に、肢体不自由の方とか身体障がい者の方ってどうしてもお断りされてしまうケースがあるじゃないですか。(中略)

私自身も身体障がい者の方とスポーツをしたことなくて。それって、やっぱり、環境。中学校も高校もなんですけど、中学校と高校に身体障がい者がいないから、体育とか部活動とか一緒にすることがなくてって思うと、身体障がい者と健常者が一緒にスポーツをするっていう社会はなかなかできていないような気がするんで、スポーツをする以前に、まず生活を共にするっていうところから始めないとその活動に進んでいかなくなってしまうと思います。身体障がい者の方が、例えば、スポーツ観戦とかをするに当たって、東京ドームとか京セラドームとか、野球観戦だったら観戦する場所の設備がまだ障がい者が気楽に行けるような設備になっていないというか。階段が多かったりとか、ドームのチケットを取って席に行くにも簡単に行けないっていうか、健常者なら歩いて普通に行けばいいのを、身体障がい者の方が行くってなると、障がいの場所とかにもよると思うんですけど、例えば、車いすの方

だったら人に助けてもらいながら席に行かないといけないとか。その身体障がい者の方が行きづらいというか、スポーツ観戦する場所も、目が見えない方とかがだったらそもそもスポーツが目の前で終わっていてもそれを見ることができないから、果たして自分が目が見えない視覚障がい者だったらスポーツ観戦に行くかって言われたら、絶対行かないと思って。(No.2)

そもそもの健常者の人でも社会人だと、あんまスポーツする場所がないと思うんで。障がいを持って方なら余計スポーツをするっていう場所は、あんまりないんじゃないかなっていうふうには思います。一番は場所、スポーツをするっていう、みんなが集まってスポーツできる場所があると思います。健常者の人やったら、そもそも公園さえあればボールとなんかでサッカーできるけど、障がいを持って方やとそういうわけにも多分いかないと思うんで。しっかり設備整った場所じゃないとスポーツするのが危ないと思うんで、施設とかの提供が一番大切かなって思います。(No.6)

また、一般の障がいのある人々がスポーツ活動に参加するために実施する公的支援への賛否を問うたところ、すべての回答者が賛成であると表明した。賛同する理由には、健康政策として誰しものがスポーツに参加できる環境が重要であるという認識や、障がいの問題は他人事ではないという意識などが挙げられた。

結構、需要があるスポーツには投資したほうがいいと思っていて。そうすることで、普通ですけど、そういう方の、例えば、制限があるからこそスポーツができないってなると健康状態が悪くなってしまいます。逆にまたそこで（医療のために）税金をかけないといけないみたいなことになってしまうみたいになるから、スポーツは心のケアもできると思うし、税金をかけるべきだと思います。(No.1)

もし自分が今、障がいがなくても、これから障がい者になるかもしれないわけじゃないですか。自分に置き換えたときに、障がいのある人たちが活動できる場所は少ないままでいいよって言えるかって言ったら、やっぱり障がいの有無にかかわらず、一人の人間として運動できる方がいい。そういうところの不便さをなくしていくべきと訴えかけたい。(No.5)

3.6. 障がいや障がいのある人に対する印象と問題認知

最後に、障がいや障がいのある人に対して抱くイメージや生活環境に関する理解について聴取した。まず、障がいという言葉や障がいのある人に対して抱くイメージを問うたところ、「不自由さ」や「かわいそう」という発言がみられた。具体的な発言は以下の通りである。

一番のイメージは、不自由さっていうイメージが一番強いと思います。僕らが簡単にできることでも、なかなか難しいことが多いと思うんで。生きていく上でも苦労とか多いと思うので不自由っていう言葉が一番、出てきます。視覚障がいとか、白杖持って歩いている人たちのイメージが強いです。(No.6)

思っちゃいけないなって自分ですごい思ってるんですけど、かわいそうだなっていうふうには思う。街で見かけたときとか、目見えない人とか、棒を使って歩いている人とか、最近よく見るなって思うんですよ。助けてあげたいって思うけど、助けられないし。ちょっとかわいそうだなって。思っちゃいけないだろうなってずっと思ってるのに、かわいそうだなって思う。(No.10)

また、障がいのある人がサポートを求めるような場面に遭遇した場合を想定し、自身の行動予測について聴取した。回答者の中には、これまで障がいのある人との交流経験がなくても、手助けが必要な場面は積極的に行動することは可能だと発言する者もあり、一概に障がいに関する知識や障がいのある人との接触経験が行動に直結するとはいえない。しかしながら、知識や経験の不足、そして自分が果たして本当に役に立つのかという不安や懸念を感じやすいという旨の回答が多かった。例えば以下のような発言である。

困ってなさそうだったっていうのもあるけど、困っていても声掛けないと思う。(どうやって)声掛けたらいいか分かんないし、それってちゃんと(方法が)あるじゃないですか。その人が前にいてとか、そういうのも分かんないから、変に声掛けて変に言われても嫌だからと思った。(No.10)

手助けしたいなはありますが、本当に大丈夫なの？みたいな。そんな知識もなくて、その人が本当に困っているかどうか分かんないしみたいな状態で声かける

のはちょっとなって言って、いつもやめちゃいます。ちょっと葛藤しますね、自分の中でも。大丈夫かなって。その人が本当に助けてって何かを出したら行きますけど、そうじゃなかったら、大丈夫？ってちらちらしながら距離を置いちゃうのかな。(No.13)

次に、障がいのある人が日常的に抱えている問題は何か、また、障がいに対する差別・偏見は社会に存在しているか、存在しているとしたらどのような内容だと考えるかを聴取した。

まず、障がいのある人が日常生活を送る上で抱えている問題については、以下のように身体障がい（視覚障がいを含む）に関する言及が多くみられた。生活のしづらさの原因については、障がい当事者が暮らす地域のハード面の合理的配慮の不足に起因するという回答を得た。

目で得る情報ってきつと大半だと思うので、それがなくなるときに、耳と手と体の感覚で情報を得るっていうのは難しいことだし、肢体不自由の方も、きつと何かしら困ることがあると思うので。スーパーでどうやって買い物するのか。もし一人暮らししてて、料理も自分でやるってなったときに、どうやって商品を買っているんだろうって。もちろんお店の人が、これはどこって聞いて、こっちですって案内しているのかもしれないけど、お店のポップにも点字があったら、一人で買い物できるのかなと思ったりしますね、今。(No.13)

一方で、障がいに対する差別や偏見の原因については、障がい者が仕事や学業の能力に直結するという観念など人々の心理的態度が関係しているとの発言がなされた。

健常者と比べて何ができるのというか、仕事とかでも、できる仕事、多分、限られてくるかと思うので、おまえは障がい者だからその会社には入れないとかがあったらそれも差別だと思いますし。でも、高校とかも身体障がい者の受け入れとかを受け入れがある、ないとかを議論している時点で、それがもう私は差別だかなって思ってしまう。(No.2)

さらに、この偏見や差別の対象となる人々は一概に障がい者という括りではなく、障がいの種類による差異が生じているとの発言を得た。特に、精神障がいや発達障がいなど、目に見えない障がいについて言及がなされた。例えば、以下のような発言である。

目に見えて分かる障がいていうのは、割と偏見とかって減ってきているのかなと思うんですけど。こちら側（私たち）は、理由はあるんだろうなみたいとか、分かるじゃないですか、こういう理由で車いすに乗っているんだとか。けど、知的障がいの人っていうのは、会話ができなかつたりする分、意思疎通が難しいっていうので、なかなか偏見ってなくならないのかなとも思います。大きい声とかを急に出されると、びっくりしちゃうっていうのもあるし、怖いっていうのもあるのかなと。(No.4)

内面的な障がいは、ぱっと見じゃ分からへんことが多いから、助けを借りにくいかもあるし、痛い視線も感じたりすることが多いんじゃないかなって思うけど。目に見える障がいて言ったらちょっとあれやけど、足がないとか手がないとかやったら、周りの人もあの人障がいなんやなってすぐ分かって、助けられる場面がそっちの人のほうが多かつたりするんじゃないかなっていうふうに思ったりします。(No.8)

身体的とか精神的な障がいを抱えている人とかがいたら、そこまで近づけないっていうか。前もあったんが、電車とかで隣の席が空いてたりとか。他の人やったら全然座ってるところ、立って座ってなかつたりみたいな感じですね。奇声とかもし発してたら、それで絡んでしまって、問題は起きないとは思いますが、もし起きたりしたら、どうしたらいいか分からない、対応は難しい。なので、なるべく関わるのを避けてるんだろうなと思います。(No.7)

4. 考察

本調査では、大学生を対象に、パラリンピック、パラリンピアン、一般の障がい者に対する認識や態度について聴取した。まず、パラリンピックはひとつの国際競技大会として位置づけられつつあることが確認された。多くの回答者にとって、パラリンピックとオリンピックの違いは競技に障がいの有無を含んでいるか否かに限定され、各大会に出場するアスリート間にも差異は認識されていなかった。ロンドン2012パラリンピック以前の研究においては、健常者のスポーツと対比した際に「二流のスポーツ」としてパラスポーツが認識されており、身体的な違いから嫌悪感や不快感を抱かれるケースがあ

るとされていた (Fitzgerald, 2012; Hodges et al., 2015)。だが、近年はスポーツのひとつとして認識されつつあることが明らかにされている。Pullen & Silk (2020) は、パラリンピアンや障がいのあるインフルエンサーが「健常者以上」と表現されることについて、メディアで取り上げられるこうした人物が、障がい者と健常者という二元論的な関係を破壊するものであるとする。また、アスリートとしてのパラリンピアンの価値や、健常のアスリートをも超える競技パフォーマンスを発揮する存在として認識されていることも指摘している。

本研究においても、パラリンピックは、選手が競技に挑む姿を観戦する場であり、またパラリンピック競技の面白さを純粋な驚きをもって表現する回答者もみられたことから、日本においてもパラリンピックは国際競技大会としての地位を確立していると考えられる。しかしながら、多くの回答者がパラリンピアンへの評価を述べる際に「障がいがあるのに」「障がいがあっても」など「障がい」を前提として、選手の「頑張り」や「努力」を評価する傾向にあった。よって、Pullen & Silk (2020) が指摘する障がいに関する二元論を打破する存在として認識されているかは本調査では断言できない。

一方で、パラリンピアンと一般の障がいのある人ともに、日常的に抱えているあらゆる問題は、個人の努力をもって解決されるものとしては捉えられていなかった。先行研究において、人生の失敗や成功を個人の努力の度合いと強い結びつきを覚える人は、そのイメージに合致するパラリンピアンを高く評価する傾向にあり、一般の障がいのある人に対しても同程度の努力を求める傾向にあることが指摘されていた (Henry & Sears, 2002)。しかしながら、本調査の回答者は、パラリンピックやパラリンピアンのパフォーマンスを通じて動機づけられる対象には、障がい当事者ではなく自分自身を挙げ、パラリンピアンの姿は自分自身の生活状況やスポーツへの取り組みを省みる契機として映っていた。

パラリンピアンの評価に関しては「障がい」を前提としていても、一般の障がい当事者についても同程度の努力を求めたり、障がいに関する問題を個人の努力量に押し付けているわけではないため、パラリンピックやパラリンピアンが、「頑張る障がい者」に対する過度な期待につながるかどうかは今後の研究課題となる。

次に、パラリンピックが社会に与える影響について聴取したところ、回答者の多くは障がいに関する知識の普及について言及した。パラリンピックは、障がいに関する主要なメディアコンテンツであり、障がいのない人にとっては、障がいのある人との間接的な接触をもたらし、障がいに関する知識を得る機会につながる可能性が示されている (Ellis and Goggin, 2015)。本調査の対象者の多くが日常的に障がいのある人とコミュニケーションを取る環境にいないことから、こうした障がいに関する知識の構築の場とし

てパラリンピックの機能が認識されているとも考えられる。

一方で、日常生活で見かける障がい者との交流やサポートに関して、自身の障がいに関する知識不足を理由に躊躇するという回答を多く得た。また、パラリンピックやパラリンピアンに対して抱く印象と、一般の障がい者に対して抱く印象には差異が生じていた。よって、パラリンピックを通して得る障がいに関する知識や認識と、全般的な障がいに関する知識や認識は必ずしも一致しないことが明らかになった。Beacom et al. (2016) は、パラリンピックやパラリンピアンには障がいに関連した問題や不平等について関心を高める媒体としての役割が期待されているものの、障がい者が依然として教育、雇用、余暇からの排除を経験している最大の集団の一つであるという現実との乖離があることを指摘している。また、Pullen & Silk (2020) は、パラリンピック競技には知的障がいや身体障がい以外の障がいが含まれているにも関わらず、パラリンピックは身体障がい（切断、車椅子、低身長など）のみを対象としているという一般的な認識が根強いと指摘する。パラリンピックやパラリンピアンは、障がいに関する日常的な理解を形成する上で、重要な社会的アクターとして役割を果たしていることは本調査においても認められるが、伝達される情報や受容されるメッセージは偏重するという一定の限界性についても理解を深める必要があるといえる。パラリンピックやパラリンピアンを通じて発信されるメッセージと、障がいの問題の相互作用については、障がい者の中にも含まれる様々な属性（例：パラリンピアンと一般障がい者／身体障がいと精神障がい）など個別に議論する必要があるといえよう。また、今回の調査は大学生のみを対象としているため、調査対象者を拡大した上で継続的な調査実施が求められる。

引用参考文献

- Bartsch, A., Oliver, M. B., Nitsch, C., & Scherr, S. (2018). Inspired by the Paralympics: Effects of empathy on audience interest in para-sports and on the destigmatization of persons with Disabilities. *Communication Research*, 45(4), 525-553. <https://doi.org/10.1177/0093650215626984>
- Beacom, A., French, L., & Kendall, S. (2016). Reframing impairment? Continuity and change in media representations of disability through the Paralympic games. *International Journal of Sport Communication*, 9(1), 42-62. <https://doi.org/10.1123/IJSC.2015-0077>
- Berger, R. J. (2004). Pushing forward: Disability, basketball, and me. *Qualitative inquiry*, 10, 794-810.
- Ellis, K. (2008). Beyond the Aww factor: Human interest profiles of Paralympians and the media navigation of physical difference and social stigma. *Asia Pacific Media Educator*, 19, 23-35. <https://search.informit.org/doi/10.3316/informit.379368276430972>
- Fitzgerald, H. (2012). Paralympic athletes and 'knowing disability'. *International Journal of Disability, Development and Education*, 59(3), 243-255. <https://doi.org/10.1080/1034912X.2012.697721>

- Henry, P. J., & Sears, D. O. (2002). The symbolic racism 2000 scale. *Political Psychology*, 23(2), 253-283. <https://doi.org/10.1111/0162-895X.00281>
- Hodges, C., Scullion, R., & Jackson D (2015) From awww to awe factor: UK audience meaning-making of the 2012 Paralympics as mediated spectacle. *Journal of Popular Television*, 3(2): 195-212. https://doi.org/10.1386/jptv.3.2.195_1
- Howe, D. P. (2008). *The Cultural Politics of the Paralympic Movement*. Routledge.
- Keller, R. M., & Galgay, C. E. (2010). Micro aggressive experiences of people with disabilities. In D. W. Sue (Ed.), *Microaggressions and marginality: Manifestation, dynamics and impact* (241-267). John Wiley & Sons.
- Pullen, E., Jackson, D., & Silk, M. (2020). Watching disability: UK audience perceptions of the Paralympics, equality and social change. *European Journal of Communication*, 35(5), 469-483. <https://doi.org/10.1177/026732312090929>
- Silva, C. F., & Howe, D. P. (2012). The (In) validity of supercrip representation of Paralympic athletes. *Journal of Sport and Social Issues*, 36, 174-194. <https://doi.org/10.1177/01937235114433>

別添資料：インタビューガイド

番号	質問内容
1	あなた自身、もしくはあなたの家族に障害者手帳保有者はいますか？
2	あなたが抱くパラリンピックのイメージを教えてください。
3	あなたは過去にパラリンピックを観たことがありますか？観たことがある大会、競技、またどのようなメディア媒体（テレビのニュース：YouTubeの中継）だったか教えてください。
4	あなたがパラリンピックを観戦した時の感想を教えてください。
5	あなたは、パラリンピックは社会に対してどのような影響力を持つと思いますか？また、あなた自身はその影響を受けていますか？
6	あなたはオリンピックとパラリンピックのイメージに違いを感じますか？感じるとすれば、それはなんですか？
7	パラリンピックに出場するような選手について、あなたが抱くイメージを教えてください。
8	パラリンピックに出場する選手と、オリンピックに出場する選手について、あなたは違いを感じますか？感じるとすれば、それは何ですか？
9	パラリンピックへの出場を目指す選手はどのような問題や障壁を抱えていると思いますか？また、その解決を支援したいと思いますか？（例えば、寄付、応援に行くなど具体的な行動への参加意図）
10	オリンピック・パラリンピック競技大会のメダリストは、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会から、報奨金が支給されることになっています。スポーツ庁によると、金メダルでオリンピックでは500万円、パラリンピックでは300万円、銀メダルで200万円、銅メダルで100万円とされています。練習環境の充足や報奨金の金額など、オリンピックと同等の待遇をパラリンピアンが求めることについてあなたは賛同できますか？賛否どちらでも構いませんので、その理由を教えてください。
11	あなたは、障害の有無に関わらず十分にスポーツ参加できる社会になっていると思いますか？できる・できない理由はなんだと思いますか？
12	令和4年12月に実施した「スポーツの実施状況等に関する世論調査」によると、20歳以上の週1日以上スポーツ実施率は52.3パーセントとなっています。また、令和4年12月に実施した「障害児・者のスポーツライフ調査」によると、20歳以上の週1日以上スポーツ実施率は30.9パーセントとなっています。あなたは、特に障害のある人がスポーツ参加できる環境整備（例：障害者専用のスポーツセンターの建設運営）をするために、公的な支援（税金投入）をすることは、あなたや社会にとって大切だと思いますか？大切だと思う、もしくは思わない理由を教えてください。
13	あなたが障害のある人に対して抱くイメージを教えてください。また、その際あなたがイメージした障害の種類について教えてください（キーワードでも可）。
14	あなたの親族や友人、職場や学校などあなたが生活している環境に障害のある人はいますか？その人はどのような障害がありますか？

パラリンピック・パラリンピアン・障がい者に対する人々の認識：
大学生を対象としたインタビュー調査からの検討

番号	質問内容
15	あなたは障害のある人と身近に接したことがありますか？あるとすれば、それはいつで、あなたはどのように接していますか（接していましたか）？また、その人にはどのような障害があり、あなたはどのような印象を持っていましたか？
16	障害のある人を手助けした・したいと思った経験はありますか？また、手助けできなかった経験はありますか？どちらのエピソードも詳しく教えてください。
17	あなたの地域に住んでいる障害のある人はどのような問題を抱えていると思いますか？
18	障害の種類によって抱える問題に違いがあると思いますか？
19	障害の種類によって暮らしやすさに違いがあると思いますか？
20	あなたは、障害のある人が抱える問題や困りごとを解決するには、どのようなことが必要だと思いますか？障がいのある人全体のことでも、特定の障がいに関しても自由にお話してください。
21	社会において障害のある人に対する差別はあると思いますか？あるとすれば、それはどのような差別ですか？そのような差別はなぜ存在すると思いますか？
22	障害に対する差別・偏見問題を解決するために活動する組織や個人（例：福祉団体や障害当事者の政治家）について、あなたはどのような意見を持ちますか？また、その活動への賛同・反対を周りの人たちに表明できますか？
23	障害のある人がテレビやラジオで取り上げられることがあります（障害者を主人公としたドラマ：障害者を取り上げたドキュメンタリー）。あなたはそのようなメディアを視聴したことがありますか？それはどのような番組で、どのような感想を持ちましたか？
24	現代の社会では、人間一人ひとりの個を尊重し、様々な価値観を共有する多様性の遵守が目指されています。このような多様性のある社会の実現は、あなたにとって、またあなたの周りの人にとって、どのくらい大切だと思いますか？またそれはなぜですか？
25	多様性のある社会を実現するために、あなたはどのような行動ができる・したいと思いますか？
26	あなたは、人生における成功や失敗は何によって分かれると思いますか？自由にお話してください。

Perceptions of Paralympics, Paralympians, and people with disabilities: A study based on interviews with university students

ENDO Hanae

The Paralympics have been expected to play a certain role in solving daily problems related to disability. It has been found that knowledge of the Paralympics through direct observation and various media can change the public's perception of Paralympians and, by extension, their attitudes towards equality and inclusion of people with disabilities. Based on these expectations, empirical studies have been conducted to examine what kind of values the public finds in the Paralympics and Paralympians, and whether attitudes and behaviors towards disability and people with disabilities are changed by the Paralympics and Paralympians. However, earlier studies have focused on Western countries, while few studies have been conducted in Japan where values towards disability and sport are expected to be different from those in the West.

Therefore, as the first step of a study targeting Japanese citizens, this study focuses on university students and examines trends in their perceptions of the Paralympics, Paralympians, and people with disabilities, including the position of the Paralympics compared to the Olympics, the social impact of the Paralympics, and differences in their impressions of Paralympians and people with disabilities in general. The aim of this study is to identify trends in perceptions of the Paralympics, Paralympians and people with disabilities in general.

Nineteen undergraduate students from Universities A and B were interviewed about their perceptions of the Paralympics and Paralympians, their perceptions compared to the Olympics and able-bodied athletes, and the social and personal impact of the Paralympics.

The results of the interviews revealed the positioning of the Paralympics as an international sporting event. For many respondents, the difference between the

Paralympics and the Olympics was limited to whether or not disability was included in the Games, and the differences between the athletes competing in each event was not perceived. Earlier studies have indicated that the hosting of the Paralympic Games in one's own country will lead to a shift in the perception of para-sports as being equivalent to able-bodied sports rather than second to them, and a similar trend was observed in this study. On the other hand, many respondents tended to evaluate the "effort" and "hard work" of Paralympians related to their "disability", such as "despite their disability" and "in spite of their disability". Therefore, we need to continue to examine whether such evaluations lead to excessive expectations of "hardworking disabled people", as suggested by existing research.

When asked about their intention to interact with and support disabled people they see in their daily lives, many respondents said that they were reluctant to do so because of their lack of knowledge about disability. The differences between the impressions they had of the Paralympics and Paralympians and the impressions they had of people with disabilities in general were also highlighted, suggesting that the knowledge and perceptions of disability gained through the Paralympics do not necessarily correspond to knowledge and perceptions of disability in general. The study also recognizes that the Paralympics and Paralympians are important social actors in improving the general understanding of disability, but it should be noted that there needs to be a deeper examination of the limitations of this role of the Paralympics and Paralympians.